

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 568 号 ] 2009 年 10 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604  
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732  
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.568  
October 2009

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## バッハの音楽でクリスマス

12月5日、特別演奏会の御案内

大村 恵美子

<入場整理券>の発行

今年に入って、コンサート会場でなく、教会を会場とした演奏を、5月、8月と経験してきました。

会場として提供して下さる教会は、日本の場合、多くは入場料をとる有料の演奏会を催すのを避けることになっていて、教会での行事は自由に入れるものと考えられています。

本年5月17日に、荻窪音楽祭の一環として私たちが行った荻窪教会での演奏会では、無料で自由に聴きにきていただきました。その結果、中に入りきらず、さいわい雨は上がっていましたが、入り口ドアの外にまで立って聴かれるような、限界状況となりました。今後は、なんらかの規制を考えなければ、地域にある教会にもご迷惑となるのでは、と反省しました。

8月のドイツ・シュトゥットガルトでも、予想以上の聴衆が集まり、うれしいばかりでもない、危なさを感じましたが、いずれも敷地が広く、建物自体もよほど余裕をもって作られていますので、無事にすみました。

これらの経験から、私は、せっかく足を運ばれてきた方々を、お引きとりいただく羽目におちいる前に、あらかじめ収容力に見合った<入場整理券>を発行するべきではないか、と思いました。

世田谷中央教会への感謝をこめて

今年は、当合唱団にとって、演奏旅行その他の支出が大きく、大きなコンサートホールでの2回の定期演奏会を断念したほどですが、この12月の特別演奏会は、はじめからチャリティ公演の目的で計画されました。

元来、教会を会場とした私たちの「特別演奏会」も、入場無料・予約受けなし、を原則としてつづけられてきました。今後も、当日の座席に余裕があるかぎり、もちろん、どなたでもご入場いただけますが、満席でお断りする場合もあることを、あらかじめご承知おきいただきます。

さて、当合唱団は、長年にわたり土曜日の練習場として、世田谷中央教会の礼拝堂をお借りしてきました。古参団員・山下広之氏の編集になる「東京バッハ合唱団40年の歴史年表」(『東京バッハ合唱団40年の記録』に収録)

の1993年1月9日(土)の項には、

土曜日の練習場が、本日より世田谷YMCAから桜新町の世田谷中央教会に移転。

同盟基督教団の総本山である有名な教会である。... 教会を挙げて東京バッハ合唱団を応援して下さり現在に至っており、東京バッハ合唱団の第2の故郷といえる。

という記載も見られます。

特別演奏会

### バッハの音楽でクリスマス

日時：2009年12月5日(土)16時開演  
(15時30分開場、17時30分終了予定)  
会場：世田谷中央教会 礼拝堂

<プログラム>

カンタータ第124番《イエス 共にあらん》  
モテット(第1番)《歌え主に向かいて 新たな歌》  
クリスマス・オラトリオ 第2部《この地に野宿して》  
(讃美歌 - 会衆と共に)  
「讃美歌21」246(天のかなたから) マルティン・ルター作  
「讃美歌」104(きたり聞けよ み告げを) ボヘミア民謡

<出演者>

テノール：鏡 貴之  
フルート：山田恵美子  
ピアノ：内山亜希

ソプラノ：川合満里子(団員)

バス：室田 悟(団員)  
合唱：東京バッハ合唱団  
指揮：大村恵美子

<入場整理券> 1000円(100席限定)

座席数に限りがありますので、あらかじめ<入場整理券>をお求めください。満席の場合には、当日のご入場をお断りすることもございます。ご了承ください。

お申込み：東京バッハ合唱団事務局(上の囲み内)

いたって小規模ではありますが、この礼拝堂に対する日ごろの感謝をこめて、私たちの演奏で何らかの献金ができればとの思いで、結論として次のように踏み切ることにしました。

10月5日から、100枚の〈入場整理券〉の受け付けを開始します。入場ご希望の方は、私たちの目的にご賛同いただき、1口1000円のご寄付をお託しいただき、それと引き換えにこちらから〈整理券〉(1口につき1枚)をお渡しします。

会場の世田谷中央教会礼拝堂は、演奏スペースを確保すると、ご来客の方々のためには100席ほどが限界となりますので、〈整理券〉の発行は100枚で締め切らせていただきます。

これは、団員の方々にも同様で、一律に同時発行・同時締め切りとしますので、ご了承ください。

後援会員の皆様へ

いちばん申し訳なく思うのは、後援会員の皆様で、今回も5月同様、招待状を差し上げることができません。苦境をお察しいただき、合唱団が上向きに抜け出せるようになるまで、どうぞしばらくのご容赦を、切にお願い申し上げます。

特別演奏会

## バッハの音楽でクリスマス こどもバンド 募集

プログラム最後の《きたり聞けよ み告げを》(讃美歌104)のために、こどもバンドを募集します。

(保育園・幼稚園児くらい～中学生くらい)

右の楽譜1～4のどれかを選び、

1.(旋律)

2.～4.(リズム。音程のないものでもよい)

を、任意の自分の楽器(ピアノ以外)で合奏します。

あらかじめ、よく暗譜しておいて、

11月21日(土)15:00～15:30

11月28日(土)15:00～15:30

当日12月5日(土)14:30～15:00

(本番16:00～17:30)合唱といっしょに練習します。

12月5日当日は、曲目の最後17:00ごろに出演。

ピアノとバンドだけの序奏(全体)

第1節は、合唱だけ(無伴奏)

第2,3節は、バンドと会衆ふくめ、全員で演奏

参加は無料

本人の名前 住所 学年

楽器名 団との関係/紹介者名など

を書いて、「こどもバンド」係り(下記)まで、なるべく早く申し込んでください。

お申込み:「こどもバンド」係り、加藤剛男(団員)

[郵送] 〒158-0081 世田谷区深沢 8-18-4

[電話/FAX] 03-3704-0886

[メール] tkato@ruby.dti.ne.jp



特別演奏会チラシの挿図: グリュネヴァルト「天使たちの合奏とキリスト生誕」16世紀, ウンターリンデン美術館(コルマール)。今夏の演奏旅行中、フライブルクからストラズブルへの移動の途中に訪れた。

### 讃美歌 104 《きたり聞けよ み告げを》

大きな楽譜のご請求とお問い合わせ:

東京バッハ合唱団事務局

(連絡先は、当「月報」第1ページの表題タイトル  
囲みをご覧ください)

## <第5回ヨーロッパ演奏旅行>

### フライブルクでのミサ後のご挨拶

大聖堂ミサ(2009年8月9日)の終了後、付属音楽学校でお茶の会をご用意いただき、この場で、聖堂楽長ベーマン氏とフライブルクバッハ合唱団指揮者ポイアーレ氏のご両人からご挨拶をいただいたことは、9月号の月報の「速報」でお伝えしたとおりです。

このたび、ご両人のスピーチの日本語訳(楽長秘書・西岡智子さん通訳)を、バス団員の菅間さん撮影の当日のビデオから、ご友人の別島和江さんが書き起こして、ご提供くださいましたので、ご紹介します。

(いずれも、西岡さんにお目を通していただいたものです。[ ]内は編集部で加筆)

#### 聖堂楽長ボリス・ベーマン氏のご挨拶

ポイアーレ教授から話があったのが、今から4カ月ほど前ですが、東京の合唱団とドイツの合唱団が、以前より合同合唱をやっていて、よい関係をもっていると聞いていました。また、今回は夏休みということもあり、両方の時間がぴったりあったということで、私たちはすぐにこの計画を立てました。

今日、皆さんがバッハを歌ってくださったということは非常に感慨深いことです。なぜかというと、私たち2つのグループがバッハを通して友好関係があるというだけでなく、バッハという1つの音楽を通して2つの国民が一緒に音楽が出来るという喜びを今日体験できたことです。

この少年合唱団が、来年創立40周年を迎えます。その記念で私たちは、来年2010年に日本演奏旅行を企画しています。8月の末から9月の初頭にかけてです。後でパンフレットをお渡ししますが、そのときに日本でバッハの作品を歌います。今日皆さんが歌ってくださったバッハの作品を、小さいミサ[Missa Brevis]で歌ってくださったということで、私たちも日本でバッハの曲を歌おうと思っているという関連があります。

「小さいミサ」[小ミサ曲]というのは、ルターが用意した内容について、バッハが作った作品なのです。それを小さなミサの形でやるのです。当時、ルターが書いた内容というのは、カトリックと非常に深い関係があって、それは肉と血、イエスの体と血というのは、2つの教会[カトリックとプロテスタント]の間で全く差別がないものなので、それについて歌うというのは当時は全く問題がなかったのです。今はいろいろ問題があって、話し合いをしなければならないのですが。

今日皆さんが歌ってくださった内容と、その式典と今日の日にとが聖書の内容とぴったり合ったので、非常に感慨深いものがありました。

私たちが、キリスト教会の中で、カトリックとプロテスタントとが分かれたものではなく、1つのものとして

いくことを「エクメニッシュ」[ökumenisch、英語でエキュメニカル。「世界教会一致運動」の意]といいますが、それを行なっていくためには、もともとの内容のことを歌うということ、まさにそれを皆さんが今日歌ってくださったそのことで「エクメニッシュ」という考え方が新たになって、しっかりしてきました。心から感謝しています。

今日ここで歌ってくださったことに本当に感謝します。ありがとうございました。

私たちが来年日本に行きますので、そのときはまたよろしく願いいたします。これから、この旅の続きで、ドイツの中を見て歩かれると思いますが、楽しんでください。また、今後の旅での合唱の成功をお祈りいたします。

#### ハンス・ミヒャエル・ポイアーレ教授のご挨拶

私も心から感謝をしたいと思います。楽長がすべて言ってくくださったので、あまり話すことはありませんが、それでも2つの意味でもう一度感謝したいと思います。

その2つのことの1つは、今は夏の季節で音楽を職業としている人達が皆、夏季休暇で居ないんです。そんな中で、ここの大聖堂でこの合唱団が歌うことをすぐにOKしてくれたことに、まず心から感謝します。次に、音楽は国境を越えて、人と人の間を繋ぐということはよく言われています。そして、今回はこういうところで、バッハの音楽を通して2つの国民が一緒になろうとしている、そのことが私には非常にうれしい。

すべての大きな出来事というのは、小さなことから始まっていくとよく言われますが、私たちのこの出会いは小さなものかも知れませんが、ここから大きな出会いになっていくようにしたいと考えています。もう一度本当に感謝いたします。人と人の繋がり、団体と団体の繋がり、そして音楽の繋がり、この3つを通して、私たちは範疇の違う人たちを繋げることができます。これは大変素晴らしいことで、それが今回達成できたことで、皆さんに感謝します。



[上]:ご挨拶をされるポイアーレ先生。



[左]:ベーマン先生(中央)と通訳をしてくださった西岡智子さん(その左)。

## シュトゥットガルト ムターハウスからのご返礼状

ゴットフリート・クラス、牧師・Dr.  
シュトゥットガルト福音派プロテスタント  
ディアコニッセ施設長

お手紙と親しいお言葉を頂きまして、本当にありがとうございました。ディアコニッセ（奉仕女）施設の私たちも、皆さまのご滞在をととても大切に記憶にとどめております。あなたと、あなたの合唱団の方々との出会いは、まことに印象深いものでした。当施設のシュヴェスターたちも大変よろこんでおります。皆さまをこの施設にお泊めすることができたことは喜びでありましたし、皆さまがこの施設に満足されたと伺って、私たちも幸せな気持ちです。

ムターハウス（母の家）のよい雰囲気が皆さまの演奏にもよい影響を与えたと書いてくださいましたが、あらためて申すまでもなく、これは私たちにとって格別の喜びでした。

皆さまの演奏それ自体は、私たちの心を深く揺り動かすものでした。バッハの音楽にたいするこの合唱団の傾倒が私たちにも伝わってきました。バッハの音楽に対する真に深い喜び　そして究極的には神に対する真に深い喜び　が余韻となって響きました。

当日の献金は1400ユーロ（約196,000円）を超えました。これは通常のコンサートの場合には決して起こりえない信じがたい額でした！　あなたと合唱団の皆さまに重ねて心からお礼申し上げます!!!　皆さまがこの大きな贈り物を私たちにしてくださったのです。

ドイツにまたいらっしゃる機会がありましたら、ぜひ必ず私どもをお訪ねください。私たちはあなた方のことをいつまでも心にとどめております！

神の祝福が皆さまと皆さまの合唱活動とともにありますように。どうか今後も永く、J・S・バッハの偉大な音楽に対する喜びがあなた方を結びつける絆でありますように。

団員みなさまに、心からよろしくお伝えください。  
シュトゥットガルト奉仕女の家より、心をこめて。



出発の前に全員で記念写真。



出発のバスを見送るシュヴェスターたち。左から3番目がゲッケルマンさん。ムターハウスの通用口にて。

ウルリーケ・ゲッケルマン  
ディアコニッセ・ムターハウス  
主任シュヴェスター

無事ご帰国とうかがい、うれしく存じます。

私たちからも、皆さまに心から感謝申し上げたいと思います。皆さまが私たちの客人であられたことは、とても素敵なことでした！　ある出会いにさいして、神はなんとゆたかな富を私たちに授けてくださるのかと、気づかされるのが本当にあるのですね。

皆さまも私たちに多くの仕方で幾重にも贈りものを与えてくださいました。みなさまの関心により、友好のこころにより、礼拝における合唱により、寄付により、演奏により、また館内におけるさまざまな出会いにおいて…。あの「身と心をもって」歌われ、聴く者のこころに真に「火花を点じた」あの歌声を、いまもなお私は思い起こして、よろこびを覚えます。

皆さまと皆さまのコンサートの写真数葉を、このたび私どものフリーデリーケ・フリートナー・ハウスのロビーに掲出しました。これで他のお客様にも皆さまのご来訪について少しばかり伝えうることになりましょう。大村さまと合唱団のみなさまに心からのご挨拶をお送りします。  
(いずれも、訳・森永毅彦)

### ドイツでのミサと演奏会のCD、ただいま製作中

演奏旅行へのご支援をいただいた皆様へ

旅先での演奏の録音は、記録誌の編集とあわせて、現在、製作中です。

#### フライブルク大聖堂ミサでの讚美(8月9日)

日曜のミサ式典のなかで歌われた<キリエとグロリア>、<サンクトゥス>を、鐘の響きに始まる司祭の始唱やカントールの朗唱、会衆聖歌などの流れの中に織り込んで、実況のままに編集する予定です。

#### シュトゥットガルトの2つのコンサート(8月12、13日)

パウロ教会では、すばらしい聖歌隊のメンバーとの共演。ムターハウスでは、満員の聴衆に見守られて、われわれだけの熱演。いずれも、ソプラノ光野孝子さん、フルート山田恵美子さん、オルガン金澤亜希子さん方に支えられて。